

## 2019年度 入学試験問題

# 国語

## (帰国生入試)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えま  
す。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「近ごろの若者たちは本を読まなくなった」と指摘してきされることがよくあります。たしかに、テレビを見る時間やマンガを読む時間に比べて、いまの若者たちが活字に向かう時間が短くなっていることは事実でしょう。しかし、「近ごろの若者たちは本を読まなくなった」という指摘自体、すでに言い古された「常識」の一部になっています。「ほんとうにそうだ」と納得なつぞくしてしまわないで、少しばかり、この常識について考えてみましょう。

なぜ大人たちは、若者が本を読まなくなったことを嘆なげくのか。そう考えると、本を読まなくなったことで失われた、何か大切なものがあるという「前提」が、こうした判断には含まふくれていることがわかるでしょう。「本を読まなくなると、どんな悪いことがあるのか」「何が失われるのか」。そこまで考えたうえで、この言い古された指摘を納得して、「なるほど、その通りだ」と思うか。

ア、ここまで考えずに「そんなものだろう」といつてすませてしまうか。考えることを身につけようとするのであれば、<sup>①</sup>こうした常識に簡単に飲み込まこまれては コマリます。

「本を読まなくなって失われるものは何か」。この問いを少し展開して、「本を通じて得られるもの」と「本でなければ得られないものは何か」を考えてみましょう。もし本でなければ得られないものが少なければ、本を読まなくなったといつて非難されることはなくなるはずです。さあ、あなたなら、どんな答えを思いつきますか。

以下は私の答え。たとえば、本を通じて得られるものは、知識、情報、教養、たのしみ、興奮、感動など。それでは、これらのうち、「本でなければ得られないものは？」と考えると、何が残るでしょうか。いまや電子メディアの普及ふきゅうで、たいていの知識や情報は、本でなくても手に入るようになりました。活字メディアよりも数段早く、しかも手軽にさまざまな情報を手に入れることができる時代になったのです。

楽しみや感動、興奮にしても、映像・音響おんきょうメディアの発達から、本でなくても深い感動や楽しみを得ることはできます。むしろ、こうしたものは、発達したAV機器によって本よりも迫力はつりょくをもつて伝えられる時代になりました。原作の本を手活字を目で追つていくよりも、大画面の高音響のもとで映画化された作品を見るほうが、興奮も感動もずっと大きくなる可能性だってあります。

それでは「教養」はどうか。たしかに、テレビを見ても、コンピュータから得た情報によつても、あるいは講演会や大学の講義などを通じて、「知識」を得ることはできます。「教養」をたんに知識としてみれば、なるほど活字メディアでなくてもよさそうです。

それでも本でなければ得られないものは何か。それは、知識の獲得かくとくの過程を通じて、じっくり考

える機会を得ることにある——つまり、考える力を養うための情報や知識との格闘の時間を与えてくれるということだと私は思います。

ほかのメディアとは異なり、本をはじめとする紙に書かれた活字メディアでは、受け手のペースに合わせて、メッセージを追っていくことができます。イ、今この本を手に行っている皆さんは、めんどろくさいやと、一足飛びに別の章を開いたりすることも、斜め読みをして、「もういや」とこの本を投げ出してしまいうこともできます（もう少し辛抱してつきあってください）。あるいは、これまで読んできたところを、もう一度読み返して、この著者がこれから何を言おうとしているのか、ヨソウを立てることもできるでしょう。活字メディアの場合、読み手が自分のペースで、文章を行ったり来たりしながら、「行間を読んだり」、「論の進め方をたどったり」することができるのです。いいかえれば、ほかのメディアに比べて、時間のかけ方が自由であるということです。

文章を行ったり来たりできることは、立ち止まってじっくり考える余裕を与えてくれることでもあります。もっともらしいせりふに会っても、話しことばのように「そんなものかな」といつて十分吟味もしないで納得しない。そのもっともらしさを疑ってかかる余裕が与えられるということです。つまり、ありきたりの「常識」に飲み込まれないための複眼思考を身につけるうえで、こうした活字メディアとの格闘は格好のトレーニングの場となるのです。

複眼的に考えていく力を身につけるにはどうすればよいか。そのための方法として、ここでは思考力を鍛える読書の方法について説明しましょう。

あなたは本を読むとき、著者とどんな関係にありますか。「そんなこと、考えたこともない」という人もいるかもしれません。著者が好きか嫌いかで判断しているとか、尊敬に値するかどうかとか、著者との関係の持ち方はいろいろでしょう。ウ、ここで考える力をつけるための読書法を実践するためには、なによりもまず、著者と対等な関係に立つことが大切なスタートラインとなります。

とはいうものの、「著者と対等な関係」といつても、何となくわかるけど、ピンとこないな」という人が多いのではないのでしょうか。そこで、どうしたらピンとくるのか、ちょっと実験してみましよう。

まず、これまでの人生の中で、自分にとって大きな決断のときだった、と思う瞬間を思い出してみてください。学校に入学したときでしょうか、就職のとき、あるいは結婚を決意したとき……。

それではそのときの決断について、後で誰かに読んでもらうつもりになって、「私の決断」という題で四〇〇字程度の作文を書いてみましょう。さあ、実際にエンピツと消しゴムを手に、書いてみてください。

さて、書きましたか。それでは次に、あなた自身の文章を振り返ってみましょう。

何を書こうか。どんな順番で書こうか。どの程度詳しく書こうか、などなど、きつとあなたは作

文を書くうえで、いろいろ考えたに違いありません。まず、どんな場面を「決断のとき」に選んだのでしょうか。その場面を選ぶときに、他の選択肢として、どんな場面を思い描きましたか。結局、それを選ぶことになった理由は何でしょうか。

場面を設定してから、どんなエピソードを挟もうか、迷いはなかったですか。いろいろとそのときのことを思い出しながら、さまざまな出来事をどうつなげて文章にするか、考えたのではないのでしょうか。あっ、あのことも書いておこう、と思ってつけ加えた出来事はありますか。逆に、こつちを入れるなら、あのことはもつと簡単にすませておこうと、簡単にしたり、削ったりしたエピソードはなかったでしょうか。

すらすらと書いたつもりでも、誰かに読んでもらうとなると、カッコよく書こうと思って、形容詞や副詞を足したり、変えたりする場合もあるでしょう。あるいは、あのことは人には知られたくないからあまり細かく書くのはよそうと思って、書いたところをすべて消してしまった人もあるのではないのでしょうか。以上のように、ところどころであれこれ考えながら書いたことと思います。

(以下中略がありますが、この部分には筆者自身の作文の実例と完成までのプロセスが紹介されています。)

しかし、一度こうして本の一部になってしまうと、その過程は読者にはぜんぜん見えなくなってしまう。読者が著者に向かうとき、たいていは <sup>⑤</sup> こうしたプロセスを見ずに、出来上がった「完成品」のみを見ています。ともかく、書店で売っている本なのだから、そこに書いてあることは「すでに書かれた動かないもの」として、読者の目に <sup>c</sup> ウツルのです。

しかし、あなた自身の作文と私の作文を比べたように、どんな本でも、書いている過程には、さまざまな試行錯誤が含まれます。つまり、活字になった文章といえども、そこにいたるまでには、いろいろほかの文章になる可能性を切り捨てて、いまあるかたちを選び取った結果、その文章になっているのです。

よほどの天才的文章家でもないかぎり、文章を書くという行為には、必ずこうした考えながらの試行錯誤が含まれます。そして、いろいろな条件から判断して、「これでよし」と思ったものが、活字になる——それがあなたが手に取る本の文章なのです。

こうして、書くプロセスに含まれている迷いや選択ということ <sup>d</sup> ネットウにおいておくと、別の人を書いたものを読むときでも、すでに出来上がって動かない完成品であるとして見る見方から少しは逃れることができます。ほかの可能性の中でそれぞれのことばや表現が選ばれていった末に、目の前の活字になっている。そうやって本を読むと、読んでいく一つひとつのことばが、まるであなた自身がそこで書いているかのように思えるかも知れません。

著者と同じ立場に立つということは、そうした選択の過程を、読み手の側から確認していくことなのです。

このように活字として書かれたものをとらえ直す時、本の著者との「つきあい」も変わってきます。漫然と著者のいうままに、その通りに文章をなぞるように読むのではない。「ほかの文章にな

る可能性のあったもの」として目の前の活字を追っていく。つまり、「私だったらこう書いたかもしれない」とか、「どうして著者はここで、こんなことを書いているのか」を考えながら、文章を読んでいく。

どんなに偉い著者でも人間です。エ、間違えることもあれば、気づかないうちに飛躍して文章を進めてしまうこともあります。根拠としたデータが不正確なこともある。いい加減さや、間違いや、論理不整合な部分の混入も含めて、さまざまな可能性のうちのひとつのかたちとして、目の前の活字があると考えたほうがよいのです。

このように活字メディアをとらえ直してみると、それを読むという行為の意味が違ってきます。ざっと読み流して、簡単に納得してしまうのではない読書。つぎに何が書かれる可能性があったのかを、探りながら文字を追っていく読書。書き手がいきつもどりつしたように、読み手も自分の理解のペースで情報を獲得していく読書。活字メディアを相手にすることで、ほかのメディア相手ではできない、「行間」に目をむけることや、論の進め方をじっくりとらえることも可能になります。

書き手の書くプロセスを意識するようになると、書き上がったものを「動かざる完成品」だと見る見方は弱くなってくるでしょう。つまり、完成品としてむやみにありがたがって本を読んだり、書き手の言い分をそのまま何となく納得してしまったりという<sup>⑥</sup>受け身の姿勢ではなく、本に接することができるようになるのです。

こうした著者との関係をキズクことは、複眼思考を身につけるうえでの基本的な姿勢になります。というのも、相手の言い分をそのまま素直に受け入れてしまうのではなく、ちよつと立ち止まって考える習慣が身につくようになるからです。

(刈谷剛彦「知的複眼思考法」より)

問1 — 線 a ～ e のカタカナを漢字に直さない。ただし送り仮名が必要な場合にはあわせて答えなさい。

問2 空らん 

ア
---

 ～ 

エ
---

 に入ることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- |   |        |        |        |         |
|---|--------|--------|--------|---------|
| 1 | アⅡあるいは | イⅡつまり  | ウⅡまた   | エⅡすると   |
| 2 | アⅡまたは  | イⅡただし  | ウⅡそのうえ | エⅡそれゆえに |
| 3 | アⅡさらに  | イⅡしかも  | ウⅡけれども | エⅡそして   |
| 4 | アⅡそれとも | イⅡたとえば | ウⅡしかし  | エⅡしたがって |

問3 — 線①「こうした常識」とありますが、これはどのように考えることを指していますか。その内容として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 近ごろの若者たちはテレビに費やす時間より活字に向かう時間の方が短いと考えること。
- 2 近ごろの若者たちが本を読まなくなったという指摘に対して、納得できると考えること。
- 3 近ごろの若者たちが本を読まなくなったことで、何か大切なものが失われたと考えること。
- 4 近ごろの若者たちは活字に向かう時間が短いという指摘は、軽視すべきものと考えること。

問4 — 線②「本でなければ得られないものは何か」とありますが、その答えとなる一文をぬき出し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問5 — 線③「活字メディアとの格闘」とありますが、その読み方の説明としてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 話の全体の流れをつかむために、細かい部分のところどころは飛ばしながら読む。
- 2 活字に直接表されていない筆者の意図をつかもうとして、文章をくり返して読む。
- 3 筆者がどんな文章構成で自分の考えを示しているかを確認しながら、文章を読む。
- 4 道理に合っていると思われるようなことばの意味をも疑いながら、文章を読む。

問6 — 線④「私の決断」という題で四〇〇字程度の作文を書いてみましょう」とありますが、筆者は、何のために読者にこう呼びかけているのですか。次の文の空らん【 】にあてはまることばを、文中から十一字でぬき出して答えなさい。

【 】 — 【 】ということは、どのようなことであるかを、作文を通して読者にわかっ  
てもらうため。

問7 — 線⑤「こうしたプロセス」とありますが、どのようなことですか。次の文の空らん【 】にあてはまることばを、文中から九字でぬき出して答えなさい。

場面の設定やエピソードの挿入をはじめ、書いている過程で【 】を重ねること。

問8 — 線⑥「受け身の姿勢ではなく、本に接すること」とありますが、読書において「受け身の姿勢」を脱することは、どのようなことによって可能となりますか。文中から三十字でぬき出し、そのはじめと終わりの五字を答えなさい。

問9 筆者は本文をとおして、どのような本の読み方をするかで、どのようなことが身につくと述べていますか。六十字以内で答えなさい。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の潤は、母の郷里奥三河の澄川に引越してきた。そして花祭りです。※いちの舞を踊るように勧められるが、潤は拒否し続けていた。次は、同級生の岡崎周が、離れて暮らす母が会いに来てくれないことを嘆いた後に続く場面である。

泣き腫らした頬に、再び涙が筋を作る。透明な鼻水を地面に届くほどに垂らしながら、周は声を押し殺して嗚咽した。

そのとき、潤の傍らの影が動いた。

花束を作っていた里奈が、泣いている周の体を包み込むように腕を広げた。

「大丈夫だよ」

涙と鼻水でべたべたの周の顔を、迷わず自分の胸に引き寄せる。

「周ちゃんのお願ひ、ちゃんと榊神社に通じたよ」

片手で周を抱きながら、里奈は夕日が落ちていく杉山を指さした。

「この祠はね、鬼様のいる、榊神社に通じてるんだって。周ちゃんのお願ひ、鬼様に届いたよ。お母さん、きつとくる」

まだ澄川にきたばかりの頃。学校の裏の竹藪で、潤が過呼吸の発作を起こしたときと同じように、里奈は周を柔らかく X でいた。

「大丈夫。里奈だって、たくさん失敗するけど、鬼様が全部なしにしてくれる。今年は周ちゃんも、里奈と一緒に鬼様に踏んでもらおう」

それまで必死にこらえていたのか、ついに周は ① 大声をあげて泣き出した。里奈は優しくその背中をさすってやっている。

※等々 康男に眼で促され、潤はその場を A 離れた。

日が落ちると、冷たい空気の中、木々の梢が B 浮かび上がってくる。

白い息を吐きながら、潤と康男は自転車置き場までやってきた。

「相川」

② 静脈のように張った落葉樹の枝を眺めながら、潤は康男に声をかけた。

「鬼様に踏んでもらうって、どういうこと？」

「ああ、杉本はまだ知らなかったら」

自転車のスタンドを跳ね上げ、康男が涙を啜る。

山見鬼、榊鬼、茂吉鬼と、花祭りには三人の鬼が登場する。中でも一番面が大きく霊力も強い

榊鬼は、花祭りの主役とも謳われる。

その榊鬼を松明で舞庭に導くのは、 ③ 三つ舞を踊る少年たちの役目だ。

次世代を担う少年に導かれ、人里に召喚された荒ぶる鬼は、そこで 花太夫や 宮人たちと問



答を行なう。

問答によって花太夫に※ちようぶく調伏された鬼は、今度は人のために反問へんばいを踏むのだという。

「反問？」

「悪いものを踏みつけて、もう出てこないようにするんだに」

病人が出たり、悪いことが起きたりした年、依頼いらいがあれば、榊鬼は依頼主の家まで赴おもむき、病人や主人の背中を踏みつける。榊屋かんべやで子供の背中を踏むこともある。

「俺おれも里奈も、毎年、榊屋で榊鬼に踏んでもらってるだら」  
要するに、一種の魔除まよけのようなものらしい。

潤だまが黙だまって聞いていると、康男が **C** 笑みを漏もらした。

《「俺、昔、榊屋で榊鬼を蹴けったことがあるぞらよ」

「え？」

榊鬼の面は重いもので五キロを超こえる。その巨大な面を被かぶり、精神統一かふしている舞手を後ろから思い切り蹴けったという。

「初めて父ちゃんに死ぬほど殴なぐられたぞら」

「でも、なんで」

「里奈が変わらんかった」

空気がしんとした。

ひとはけの夕映ゆうばえが浮ういた群青色ぐんじょうの空を、康男は **D** 見つめている。

「毎年鬼様に踏まれても、里奈は俺らと一緒にはならんかっただに」

道に迷う。勉強べんきやうについてこれられない。言われたことを守れない。

なにかに夢中まうちゆうになりすぎれば、トイレに行くことさえ忘れてしまう。

「いつまでたっても里奈は変わらん」

腹が立つて、悲しくて、悔くしくて、気がついたときには鬼様の背中を力いっぱい蹴けっていた。

里奈を守るため、一生澄川すみがわから出ない。

その覚悟かくごに辿たどり着くまでに、傍はたからは想像さうぞうできない大きな葛藤かつとうを、康男は乗り越えなければならなかつたのだろう。》

「でも……」

手袋てぶくろをはめ、康男は自転車じてんしゃを引いて歩き出した。

③「今は、変わらんのが里奈なんだって思うようになったに」

潤だまを振り返り、康男は笑えみを浮かべる。苦しきのない、真まっ直すぐな笑みだった。

「里奈とおると、楽しい」

潤だまも自然じぜんに頷うなずいた。

あの雪の日。

きらきらと飛び散る雪飛沫しぶきの中、はじけるような笑みを浮かべていた里奈は、昔絵本で見た星屑ほしくず

の鱗粉を撒き散らす妖精のようだった。

「それに、里奈にはできないことがいっぱいあるけど、里奈にしかできないこともある」

潤はもう一度深く頷いた。自分も、それを知っている。

大丈夫——。

温かな胸に抱き寄せられたとき、心の底から安堵した。最初は少し驚いたけれど、でもあのおのとき既に、頑なに凝り固まっていた己の心の一部は溶け始めていたのだ。きつと。

「相川」

気づくと、自然と言葉が出ていた。

「俺、いちの舞、やってみようかな」

自転車をとめ、康男が潤に向き直る。

そして近づいてくるなり、勢いよく潤の両肩に手をかけた。至近距離で向き合った康男の瞳は、小さいながらも里奈に負けない輝きに溢れていた。

顔も性格も態度も少しも似ていないけれど、康男と里奈はどこかが似ている。

「でも……、本当に俺なんかでいいのかな」

「いいに決まってるぞら！」

康男は満面の笑みを浮かべ、潤の肩をバンバンと叩いた。

「杉本、この前言いかけたけど、俺たちは二人とも鬼の孫だに」

「え……」

「俺のじいちゃんは、茂吉鬼ぞら」

潤の祖父が舞っていた山見鬼が開いた浄土を閉じる。役鬼が、康男の祖父が舞う茂吉鬼なのだそうだ。

「俺らも将来、鬼になるだに」

康男の言葉に、潤は暫し茫然とした。

急になにかに縛られた気がして、俄かに恐ろしいような気分になった。

もし、事故がなければ、東京の学校に通っていた自分がこの集落にくることは決してなかったはずだ。康男や周と出会い、三つ舞を踊ることも。

そうであれば、将来、母の郷里の澄川を訪ねることがあったとしても、自分が祖父と同じ鬼の面を被るなど思いつきもしないに違いない。

しかし、東京を離れることがなかったら、今頃自分は、一体どんな風になっていただろう。

失われた冬馬の行く末を想像できないように、潤は東京で生活を続けた自分の行く末を思い描けなくなっていた。失われたのは冬馬だけではなく、東京で暮らしていた自分自身でもあることに、潤は改めて気づかされた。

もし、失われたのが冬馬ではなく、自分だったら。

或いは、もし二人とも無事で、自分が東京を離れることがなかったら。

そのときのことは、誰にも分からない。どんなに考えても、どこにも答えは見つからない。確かなのは、自分の目の前にある今だけだ。

そしてそれこそが、残された自分が本当に負うべきものだ。

将来のことまでは分からない。でも、今は、自分のやれることをやるしかない。

自転車を引きいた康男とともに校庭に戻つてくると、甲高い歓声が聞こえた。

すっかり元氣を取り戻した周が、里奈と校庭に残っていた小学部の生徒たちを盛んに追い回している。

「こらー、お前ら、帰れ、帰れ。下校時刻はとつくに過ぎてんだろうがあ」

職員室の窓から、校長先生があまり怒っているようには聞こえない、間延びした声をあげた。

周はまったく懲りずに坊ちゃん刈りを振り乱し、おどけた声をあげながら小学生たちを追い回し続けている。

潤たちに気づいた里奈が、ふり返って手を振った。上気した頬に、溢れんばかりの笑みがこぼれる。

里奈にはできんことがいっぱいあるけど、里奈にしかできんこともある。

先の康男の言葉が耳朶を打った。

⑤ いちの舞を踊る――。

潤はこのとき、初めて本当にそう決めた。

(古内一絵「花舞う里」より)

※いちの舞……七百年の歴史を持つ奥三河の伝統芸能「花祭り」で、最初に行う舞。村で一番踊り

に秀でた若者が踊ることになっている。

※祠……神をまつった小さいやしろ。

※康男……里奈とは二卵性の双子で、弟にあたる。

※三つ舞……剣を手にした二人の少年による速く入り組んだ動きの舞。

※花大夫……神事をつかさどる最高司祭。

※宮人……花大夫を補佐する村人。

※調伏……心身をととのえて悪を排除すること。

※事故……東京にいたとき、友人の冬馬と自転車で二人乗りをしていて起きた事故。

問1 この文章の登場人物の名前を示した次の空らん【1】・【2】にあてはまる名字を文中から漢字でぬき出してそれぞれ答えなさい。

・ 岡崎 周

・ 【1】 潤

・ 【2】 里奈

問2 空らん【X】にあてはまることばを、文中から探し、ふさわしい形に変えて四字で答えなさい。

問3 —線①「大声をあげて泣き出した」とありますが、これとは対照的な周の泣き方を示す表現を、文中から十字前後でぬき出しなさい。

問4 空らん【A】・【D】に入ることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 A 〓そろりと B 〓ぼうつと C 〓ぱつと D 〓じろりと

2 A 〓こつそりと B 〓はつきりと C 〓へらへらと D 〓はたと

3 A 〓ふつと B 〓まざまざと C 〓ふいと D 〓きりつと

4 A 〓そつと B 〓くつきりと C 〓ふつと D 〓じつと

問5 —線②「鬼様に踏んでもらう」とありますが、この行為の意味を述べている部分を文中から十二字でぬき出しなさい。

問6 《 》の部分には、康男と潤のどのような様子が表されていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 康男は決して報われない自分の悲しい境遇を潤に訴えていて、潤は康男の長年の苦勞を想像して心から気の毒だと同情している様子。

2 康男は自分の辛かったときの思い出をたんと潤に語っていて、潤は康男が経験した過去の悲しみに思いをはせている様子。

3 康男は父親から殴られた悲惨な事情を潤に知ってもらいたくて、潤は康男のくやしさを理解していきどおりを感じている様子。

4 康男は自分の行動の理由を潤ならわかってくれると期待していて、潤は康男らしい大胆で有意義な行動だと評価している様子。

問7 — 線③ 「今は、変わらんのが里奈なんだって思うようになったに」とありますが、これはどういうことを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 里奈のよい点も悪い点も、ありのまま受け入れられるようになったということ。
- 2 里奈に変化を求めても空しいだけなので、あきらめるしかなかったということ。
- 3 里奈の外見的な変化よりも、むしろ内面的な成長を助けていきたいということ。
- 4 里奈自身が苦しんでいるので、負担をかけまいと思うようになったということ。

問8 — 線④ 「俄かに恐ろしいような気分になった」とありますが、潤に恐ろしさを感じさせているものとしてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 土地との深いかかわり
- 2 のがれようのない運命
- 3 わずらわしい人間関係
- 4 先祖からのつながり

問9 — 線⑤ 「いちの舞を踊る——」とありますが、潤がこのように決心したのはなぜですか。次の空らん 1 ・ 2 にあてはまることを、文中からぬき出してそれぞれ答えなさい。ただし、それぞれ決められた字数でぬき出すものとします。

康男の 1 (13字) ということばを聞いて、 2 (15字) と思ったから。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

北の

丸山 薫  
まるのま かおる

どうだろう

この沢鳴りの音は

山々の雪をあつめて

轟々と谷にあふれて流れくだる

この凄まじい水音は

緩みかけた雪の下から

一つ一つ木の枝がはね起さる

それらは固い芽の珠をつけ

不敵な鞭のように

人の額を打つ

やがて 山裾の林はうつすらと

緑いろに色付くだろう

その中に 早くも

辛夷の白い花もひらくだろう

朝早く 授業の始めに

一人の女の子が手を挙げた

——先生 燕がきました

『日本名詩選 3 (昭和戦後篇)』より

\*かなづかいは、現代のものに改めています。

問1 第一連で用いられている表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 擬人法
- 2 倒置法
- 3 体言止め
- 4 直喩

問2 ——線「辛夷」と対比された色を持っているものは何ですか。詩の中から五字以内でぬき出しなさい。

問3 この詩には、力強く躍動的な様子を聴覚を働かせながら表現している連があります。それは、第何連か、漢数字で答えなさい。

問4 この詩の第三連からはどのようなことが感じられますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 燕が早くもきたことへの違和感
- 2 北国で生活する子どもの純粋さ
- 3 季節がうつりかわることの実感
- 4 授業の始まった教室ののどかさ

問5 空らん  にふさわしい季節を漢字一字で答えなさい。

4 次の1～4の慣用句について、後の問いに答えなさい。

- 1 「」を巻く……(すばらしいことに驚いて、感心する。)<sup>①</sup>
- 2 「」もくれない……(まったく関心を示さない。)
- 3 「」が地に着かない……(心や行動が落ち着かない。)<sup>②</sup>
- 4 「」を割る……(隠さずに白状する。)<sup>③</sup>

問1 1～4の「」には身体の一部を表すことばが入ります。( )の意味になるように漢字一字を答えなさい。

問2 —線①「すばらしい」と同じはたらきや用法をもつことばを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 書く
- 2 驚く
- 3 着く
- 4 広く

問3 —線②「落」について、部首名をひらがなで書きなさい。

問4 —線③「白状する」と同じ意味を表すように、次の□に入る漢字一字を書きなさい。

白状する || □白する